社会心理学における 再現可能性問題の概要

竹澤正哲(北海道大学)

September 7, 2011



Prof. Diederik Stapel suspended

The Executive Board of Tilburg University has suspended Prof. D.A. Stapel from his duties with immediate effect. Dr Stapel, who is a Professor of Cognitive Social Psychology and Dean of the Tilburg School of Social and Behavioral Sciences, has committed a serious breach of scientific integrity by using fictitious data in his publications.



November 28, 2012

Levelt Committeeによる調査報告書の概要

捏造データが含まれていた論文の総数は55本 + 10人分の博士論文

このうち、2人の院生が執筆した博士論文は全ての データがStapelの手によって捏造されたものであり、 その1人は既にassistant professorとして就職





Dirk Smeesters Erasmus University



Lawrence Sanna University of Michigan

1. 捏造と改ざん



Daryl J. Bem Cornell University sach to erotic stin uli and Keywords: psi, parapsychology, ESP, precognition, retrocausation

osychology, ESP, precognition, retrocar

ulity and Social Psycholog

© 2011 American Psychological Association 0022-3514/11/\$12.00 DOI: 10.1037/a0021524

Feeling the Future: Experimental Evidence for Anomalous Retroactive

Influences on Cognition and Affect



確率的事象としての実験

- 1つのデータポイントが確率的事象であるのと同様
 に、1つの実験もまた確率的事象に過ぎない
- 決定的な実験なるものは存在しえない いかなる 実験にも偽陽性の可能性が存在する
- 科学では、追試という名の集合知によってこの問題 の解決が要請されている
- Bem騒動は、社会心理学においてこの制度が機能していないことをスキャンダラスな形で例示した

老人プライミングの追試を巡って

- Doyen, Klein, Pichon, & Cleeremans (2012):二重盲 検法の下では老人プライミング(Bargh, 1996)は再 現できない事、実験者効果の可能性が強い事を示す
- Psychological Today (ブログ)上で、Barghが反撃
 → PLOS ONEのeditorをも巻き込んだ論争勃発
- 追試という営みが正常に機能した例であるが、教科 書に掲載される著名な研究ですら容易には再現でき ないことを鮮烈に示した

Choice overload (Iyengar et al. 2000)



選択肢の数が多いほど、選択後 の満足度が低下する現象

コロンビア白熱教室(NHK)で 有名なSheena lyengarによって 見出された



- だが追試の失敗=現象の否定ではない
 - 完全な追試は困難だから
 - 自然科学では実験のスキルを身につけるだけで長年 の訓練が必要とされる
- 同様の理由により、メタ分析も最終兵器とは言えない
- ・安易な追試=精度の低い研究による数の暴力を防 ぐための試みが生まれつつある

Many Labs Replication Project

Richard A. Klein (Florida), Kate A. Ratliff (Florida), Brian A. Nosek (Virginia)が主導

12カ国、36の研究グループが協力し、同一のプロト コルを用いて、16の研究を追試(n=6,344)

Many Labs Replication Project (2013)



Reproducibility Project

Brian A. Nosek (Virginia)が主導

トップジャーナル3誌に2008年に掲載された全論文を、

150人の研究者が追試するプロジェクト

- Journal of Personality and Social Psychology
- Psychological Science
- Journal of Exp. Psychology: Learning, Memory, and Cognition

Open Science Framework

以上2つのプロジェクトは、Center for Open Science が構築したOpen Science Framework(wikiや、 ヴァージョン管理システムなどからなるweb環境)上 で展開されている



各種財団の支援を受け、2013年に Brian Nosek (Virginia) によって 設立されたNPO

APSによる取り組み:事前登録制による追試

Perspective on Psychological Science誌は、事前登録制に基づく追試論文のカテゴリを新設(Registered Replication Reports)

実験費用に対する資金援助も提供

3. False-Positive Psychology

<u>Advartade</u> <u>Adv</u> False-positive psychology:基本的なロジック

- p = .05の検定で第1種の過誤が生じる確率は5%
- 2つの独立した検定で「第1種の過誤が最低でも1回 以上生じる確率」は9.75%(1-0.95²)
- 10の独立した検定の場合は40%(1-0.9510)

(1) 複数の独立条件

- 自尊心を高めることがもたらす効果を検討。複数の操作が考えられるが、どれが本当に自尊心を高めるか事前には不明
- ・統制条件の他に、自尊心を高める条件を複数設定→仮説通りの結果が得られた条件のみを報告
- 独立条件の数が3つの場合でシミュレーションを実施する。
 条件間で差がないにもかかわらず有意差が生じる確率は、

5% → 12.6%に上昇

• 42%の研究者が行なっている (John, Loewenstein & Prelec, 2012)

(2) 複数の従属変数

- ある操作がストレスに与える影響を検証。だがストレスの指標は複数考えられるため、複数の従属変数を測定
- 最低でもどれか1つの従属変数で仮説通りの結果が 得られたら報告
- ・ 従属変数が2つの場合、5% → 9.5%に上昇
- 78%が行っている (John et al., 2012)

(3) 共変量の統制

- 分散分析で有意な結果が得られない場合、関連しそうな変数を共変量として投入し(共)分散分析を実施し、有意な結果が得られたら報告
- ・ 共変量が1つ、条件との交互作用効果1つを投入する場合、5% → 11.7%に上昇

12.6% 1	(1) 複数の独立条件
9.5% †	(2) 複数の従属変数
11.7% ↑	(3) 共変量の統制
7.7%↑	(4) ある操作X

(1)~(4)すべての手法を組み合わせると

第1種の過誤の発生確率は5% → 60.7%に上昇

探索的研究と偽陽性のトレードオフ

- (1)~(3)の慣行は、しばしば探索的研究の名の下に 正当化されている
- 特に社会心理学のように理論的な構成概念と操作的 に定義された変数の間に一意の対応関係が定まらな い領域では、独立条件や従属変数を事前に絞り込む ことは困難

採択されつつある解決方法

- 行なったことを包み隠さず報告せよ 測定したす
 べての変数、すべての条件、すべての分析を

Psychological Science

- MethodsとResultsセクションは字数制限から外す
- Personality and Social Psychology Bulletin
 - 実験で測定された全質問項目と全条件に関する情報の提出を義務化



まずn=10のデータを取り、 有意になるまでn=1ずつデータを追加していく

5% → **22.1%**

72%の研究者が行なっている(John et al., 2012)







再現可能性問題から生まれた制度的変化

- 追試を促進する動きの広まり
 - Open Science Framework
 - Perspectives on Psychological Science
- 探索的研究の名の下に用いられてきた慣行を、禁止では なく開示によって第三者の評価に委ねる方針の広まり
 - Psychologica Science
 - Personality and Social Psychology Bulletin
- これらの変化への反対はもはや正当化できない

We need statistical thinking, not statistical rituals

Gerd Gigerenzer (1998)